

「^{まお}真魚の夢のごとく」

幼名、^{さえきまお}佐伯真魚。ご存知、我が郷土の生んだ偉人、空海（弘法大師）です。

延暦7年（788年）、15歳の少年真魚は、生まれ故郷である讃岐の国を出て瀬戸内海を渡り、畿内へ行っています。それから、ちょうど1200年の歳月を経て、昭和63年（1988年）4月、瀬戸大橋が開通しました。今年は、それから20周年記念の年です。真魚は、瀬戸内海を船で渡ったとき、どんな夢を持っていたのでしょうか。まさか空海にしても、ここに橋が架かるとまでは夢見ていなかったと思いますが、今年行われる様々な記念イベントの機会に、空海の時代の瀬戸内海、四国や畿内の様子について思いを馳せながら、夢の架け橋の次の夢を見るのも面白いかもしれません。

延暦23年（804年）、出家得度した31歳の空海は、遣唐使の一行に加わり、唐の都・長安に入ります。そしてわずか2年足らずで真言密教の第八祖となり、大同元年（806年）に帰国します。その時に唐から持ち帰ったのが起源だと言う説もあるのが「うどん」です。その「（讃岐）うどん」にちなんだ一大イベント「世界麺フェスタ2008 in さぬき」が今年、高松市と善通寺市をメイン会場にして開かれます。西アジア原産の小麦が中国で加工され、うどんやラーメンの原型になり、それが西域で乾麺となり、シルクロードを通じてさらに西に伝わりイタリアでパスタになった、という^{うんちく}蘊蓄は、聞いているだけで食欲が湧いてくる話です。今から楽しみにしています。

承和2年（835年）、62歳で空海が^{にゅうじょう}入定した後、修行僧らが大師の足跡を辿って遍歴の旅を始めたのが起源という四国八十八ヶ所巡りを世界遺産に登録しようという動きも、今年はさらに活発になってくることでしょう。本登録までには様々な課題があるようですが、札所、遍路道の保存や修景・再整備、案内板の設置など、四国全体で共通の夢を追って力を合わせていくことに大きな意味があると思います。

平成20年（2008年）という新しい年が始まりました。

年の初めぐらい夢はでっかく持ちたいものですね。そう、真魚が見ていたであろう夢のごとく。

（参考文献）「空海の夢」松岡正剛（春秋社） 「空海の風景」司馬遼太郎（中公文庫）